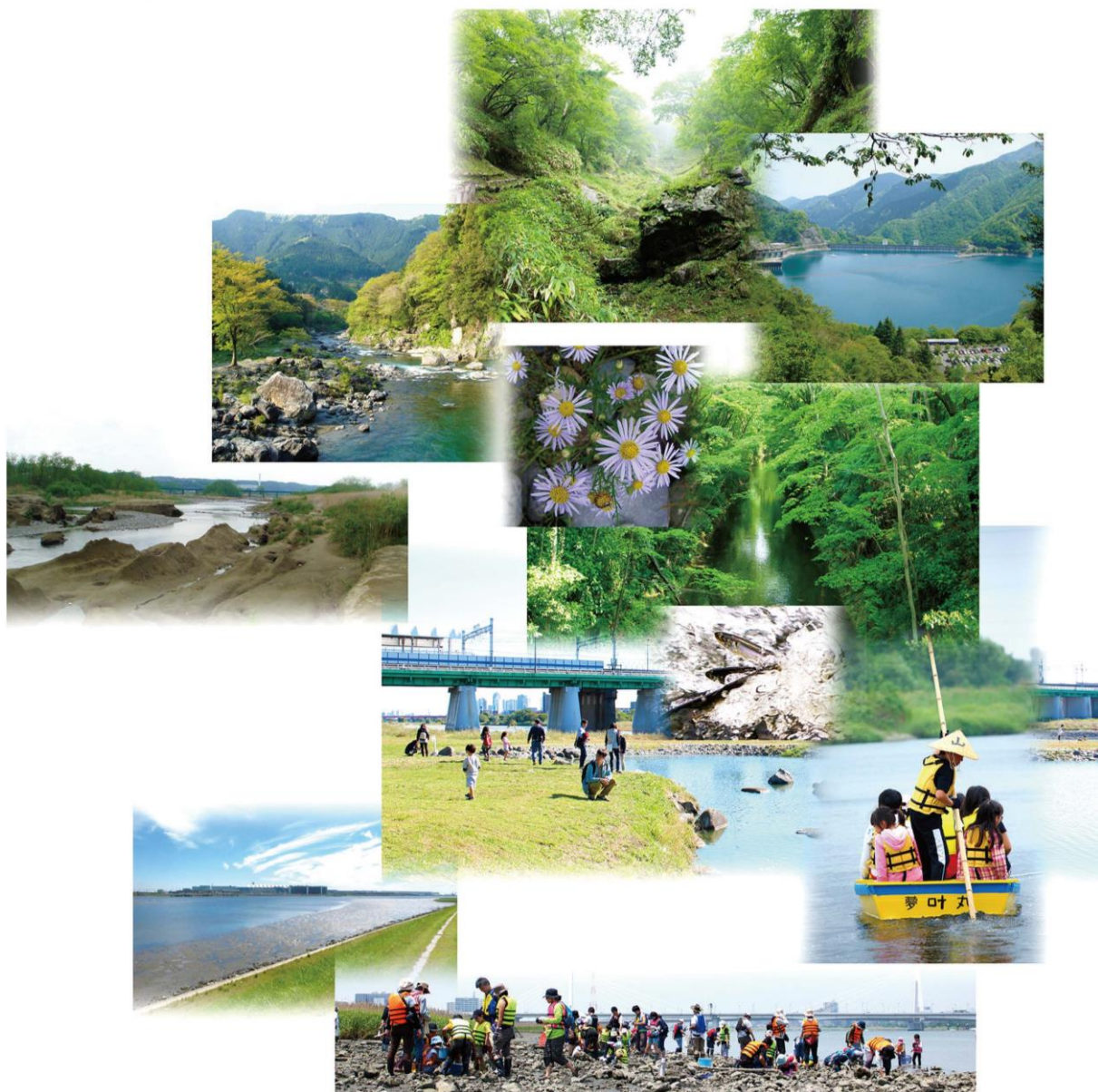

第12回多摩川流域歴史セミナー 開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」



第12回多摩川流域歴史セミナー 開催報告（詳細版）

目 次

1. 開催概要	1
2. 午前の部：現地散策	1
2.1 日野用水通水路	2
2.2 日野宮神社	2
2.3 多摩川鉄橋	3
2.4 旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室	4
3. 午後の部：多摩川流域歴史セミナー	5
3.1 開会挨拶	5
3.2 基調講演『多摩川をめぐるいとなみ』	5
3.2.1 はじめに	5
3.2.2 多摩川とアユ	6
3.2.3 行楽としてのアユ漁	7
3.2.4 多摩川の砂利採取	8
3.2.5 専業川漁師とペラ網漁	8
3.2.6 おわりに	9
3.3 質疑応答・意見交換	10
3.3.1 概要	10
3.3.2 意見交換	10
3.4 閉会挨拶	14

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日（土）10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名（会場13名、WEB46名）

主催：多摩川流域懇談会

1. 開催概要

テーマ：多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし

日程：令和2024年7月20日（土）10:00～16:00

午前の部：10:00～11:30

午後の部：13:00～16:00

形式：午前の部：現地散策（日野駅～日野市市民の森ふれあいホール）

午後の部：第12回多摩川流域歴史セミナー

（日野市市民の森ふれあいホール／オンライン開催（ZOOM））

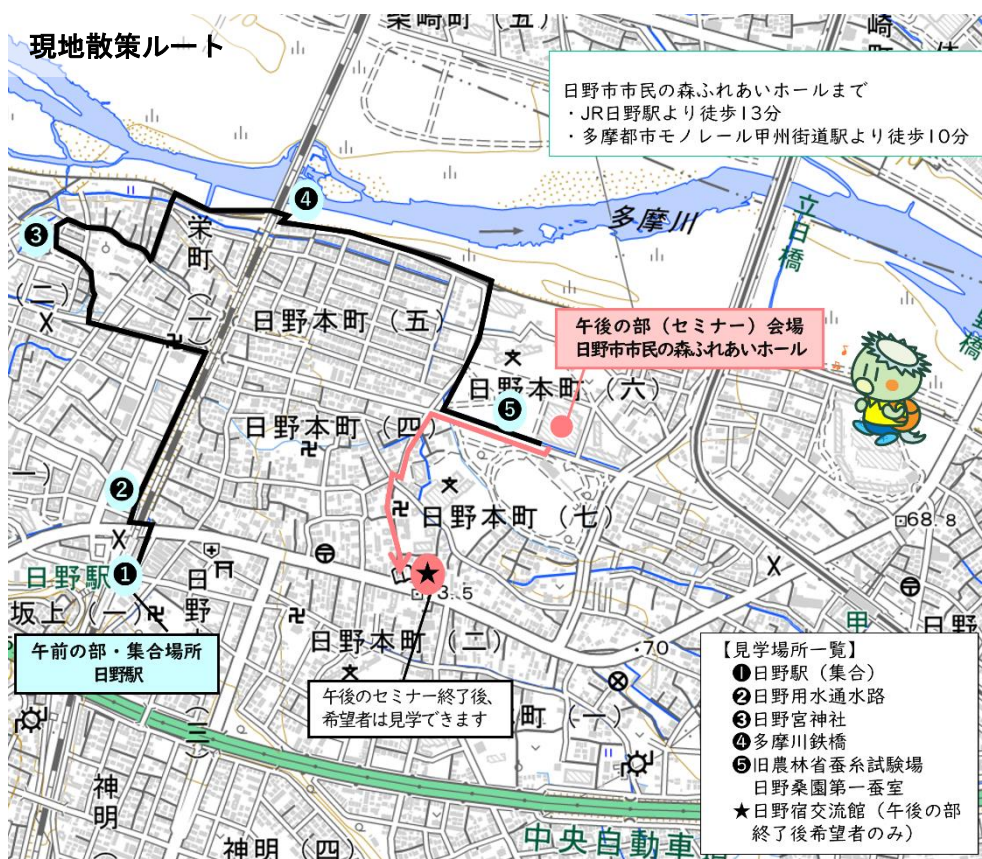
主催：多摩川流域懇談会

登壇者：金野 啓史氏（日野市ふるさと文化財課）

参加者：午前の部：9名、午後の部：59名（会場参加13名、Web参加46名）

2. 午前の部：現地散策

多摩川流域懇談会運営委員会の神谷氏より開会の挨拶があり、現地散策がスタートしました。日野市は市域の北側に多摩川が、中央部に浅川が流れ、市の東端で合流し、これら2つの河川の流域には広大な沖積地が広がっています。かつての甲州道中日野宿として栄えた日野における近現代の歴史と文化を、多摩川との関わりのうえから学びました。



第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日（土）10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

2.1 日野用水通水路

<主な内容>

- ・日野用水は多摩川を水源とする基幹用水で、永禄 10 年（1567 年）に開削されました。
- ・日野に広がる沖積地は水利を活かした水田稲作が盛んであったことから、往時の日野は「多摩の穀蔵」とも呼ばれていました。
- ・都市化と農地の減少に伴い、一部の用水が失われたものの、現在でも総延長は 116 km に及びます。
- ・JR 中央線の前身である甲武鉄道（新宿～八王子間）の建設のため、日野の沖積地には築堤が築かれましたが、沖積地に流れる用水を分断しないために規模が大きい日野用水上堰堀や下堰堀には煉瓦製の橋梁が設けられました。



2.2 日野宮神社

<主な内容>

- ・日野宮神社は四谷地区（日野市栄町 1・2 丁目）の鎮守神で、天御中主尊、高魂尊、日奉宗頼、日奉宗忠を祭神としており、日野宮神社の社殿には、日野市の文化財に指定されている木造阿弥陀如来像が安置されています。
- ・日野宮神社で祀られる木造菩薩像は、像容は観音菩薩ですが、同社の本地仏の虚空蔵菩薩として信仰されてきました。
- ・日野宮神社の本地仏の虚空蔵菩薩の使わしめがウナギであり、社殿で祀られる本蔵の天衣がウナギ似ているためウナギを畏れ多く思い、四谷地区ではウナギを食べない習慣があります。



第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日（土） 10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

2.3 多摩川鉄橋

<主な内容>

- ・現在の日野市日野本町一体は江戸時代には甲州道中の宿場町、日野宿として栄えていました。
- ・明治時代になると陸上交通の主体は鉄道となり、日野宿には日野煉瓦工場が設立され、JR 中央線の前身である甲武鉄道（新宿～八王子間）等の鉄道敷設に必要な煉瓦を供給しました。
- ・甲武鉄道開通当初は日野に停車場がなく、日野宿における街の衰退が危惧されていましたが、停車場の誘致運動と煉瓦の生産に伴う鉄道局・甲武鉄道とのつながりによって、日野駅開業が実現されたと推測されます。
- ・日野煉瓦工場で作られた「日野煉瓦」は多摩川と浅川の橋脚、橋台などの鉄道建設に用いられており、現在も中央線多摩川鉄橋の上り線で、中央線の運行を支えています。



多摩川鉄橋



多摩川鉄橋

第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日（土）10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

2.4 旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室

<主な内容>

- ・明治 44 年に農商務省は原蚕種製造所を高円寺に設け、これに付属する桑園を日野に作りました。
- ・昭和 7 年には、高円寺に置かれていた研究部門が日野に移転して施設が整備され、昭和 12 年に農林省蚕糸試験場日野桑園となりました。
- ・蚕室の配置や間取り、気抜きのある越屋根、植栽などから、暖房と換気を併用して蚕を飼育する折衷育の特徴がみられます。
- ・第一蚕室の建築は、1 階蚕室が鉄筋コンクリートで作られ、その上にキングポストトラス工法による木造の洋小屋組がのる混構造となっており、外観は当時世界的に流行しつつあったモダニズム建築に通じる設計となっています。
- ・昭和 55 年に蚕糸試験場は筑波研究学園都市に移転し、蚕糸試験場の施設の大半は取り壊されましたが、第一蚕室は残されました。
- ・その後、第一蚕室の歴史的価値に注目した市民活動が活発になり、平成 24 年に仲田の森蚕糸公園を開園、平成 26 年には日野市が第一蚕室を取得、さらに平成 29 年には混構造の特徴ある蚕室として国の登録有形文化財となりました。
- ・令和元年から令和 2 年 10 月にかけて保全修理工事が実施され、今の姿となりました。



日野桑園第一蚕室



日野桑園第一蚕室

第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日（土）10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

3. 午後の部：多摩川流域歴史セミナー

3.1 開会挨拶

多摩川流域懇談会運営委員長の神谷氏より、開会の挨拶およびセミナー主催の「多摩川流域懇談会」についての説明があり、第 12 回多摩川流域セミナー午後の部が開会されました。

<主な内容>

- ・多摩川流域懇談会は、緩やかな合意形成の場として全国に先駆けて“パートナーシップで一緒に川の問題を考える場”を設け、行政、市民、学識、企業を含めて話をおこなってきた。
- ・一時多摩川は汚れた泡だらけの川だった。また、洪水で家が流されたこともあったが、環境にも配慮するようになり、下水道も完備され、水質が戻ってきた。



3.2 基調講演『多摩川をめぐるいとなみ』

日野市ふるさと文化財課の金野啓史氏に鮎漁を中心に、日野市の近現代の歴史と文化を、多摩川とのかかわりのうえからお話をいただきました。



3.2.1 はじめに

- ・日野市の地図は犬の横顔と言われる。地域の北側を多摩川、真ん中を浅川が流れ、市の東側で合流している。南側には多摩丘陵、西側には日野台地がある。多摩川と浅川の合流点があつてその流域に沖積地（低地）が広がっているというのが日野の地形の特徴である。
- ・日野は稲作で栄えていた。明治 20 年代に現在の中央線が建設される時も、沖積地にオーブンコルベルト等の煉瓦構造物をつくり用水を分断せず鉄道を通した。
- ・煉瓦は日野煉瓦工場で生産された。煉瓦工場をつくることによって日野駅を誘致し、宿場町であつた日野が物資の集散地として生き続けるようにした。
- ・四谷は洪水の被害に遭いやすい地域だった。そこでは虚空蔵菩薩というのが日野宮神社に祀られており、この菩薩の使いのウナギが堤防の穴をふさいで洪水から村を守った伝承があり、四谷ではウナギを食べなくなった。
- ・経済力を背景に有力な農家が誕生し、そこから新選組やその活動を応援していく層が出てきた。新選組は日野の魅力の一つとして取り上げられるが、用水の物語の中に位置づけられる存在である。

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会

3.2.2 多摩川とアユ

(1) アユと川

- ・多摩川の中流域は、江戸のアユの主な供給地になっていた。羽村取水堰から府中の是政あたりまで一番アユが旨いとされ、多摩川のアユの名産地と言われていた。大消費地である江戸に出荷できる、将軍様が食べるアユということが自慢の元になっている。
- ・多摩川には非常に多くの漁法がある。大消費地の江戸に近いということで、様々な漁法がなされていたということがいえる。
- ・アユの名産地であり江戸に近かったということが、多摩川の中流域の川漁の大きな特徴といえる。

(2) 様々な漁法

- ・明治21に日野町漁業組合が組織され、漁業権の取得や漁業者の保護といった近代的な組織がされていく。
- ・鮎寄網漁業、鮎刈網漁業、鵜飼漁業、鮎刺網漁業、鮎釜漁業、鮎伏網漁業といった専用の漁業免許を取得する。寄網漁は昭和初期にかけて盛んに行われる大規模な漁法であった。
- ・大正10年の日野町町勢要覧によると、アユの漁獲量が高く全体の63%を占めた。
- ・昭和16年の七生村村勢要覧によると、七生村の漁獲量に占めるアユの割合は16%であった一方、漁獲高に占める割合は37%であり、アユの商品価値は高かった。
- ・漁の時期は6月～9月末ごろのアユの遡上する期間であり、大半が農業の副業として行われた。網元と呼ばれる豪農層などお金のある人たちが網を買い、周りの農家を集って漁を行っていた。
- ・河原のお父ちゃんという意味のカワラットウと呼ばれる人がいて、自分でできる好きな方法でとった魚を自分で食べたり周りに売って歩いたりしていた。
- ・ヒッカキは、箱眼鏡などで水中を覗き、アユが5本鉤がついたヒッカキの下を通ると素早く鉤に引っかけてとる漁法である。1尾1尾とるので非効率だが、アユの豊富だった戦前くらいの多摩川では有効な漁法であった。
- ・寄せ網漁は、シラタと呼ばれる白い網を数人で持ち魚を下流の止め網へ追い込み、ヒッカキ、ドウ、投網、巻き捕り刺し網などで捕獲する。にぎやかで見ていて面白いので暑気払い、川狩りのような見世物としても行われた。
- ・瀬張漁は、ヒッカキや鵜飼と違って鮎に傷がつかず献上鮎はこの方法でとられていたと考えられる。

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会



瀬張漁の「部屋」



ヒッカキ

3.2.3 行楽としてのアユ漁

(1) 甲武鉄道の開通と玉川亭

- ・甲武鉄道ができたことによって行楽としての漁法が行われるようになった。
- ・明治時代に入って、宿場町のすぐそばを鉄道が走るようになった。煉瓦は多摩川、浅川を渡るための構造物にも使われた。
- ・東京に住む人たちが甲武鉄道、つまり中央線を利用して鮎の味を楽しみに日野を訪れるようになった。鮎料理を楽しめる料亭ができ、客を船に乗せて鵜飼漁をし、それを食べるという商売ができた。
- ・アユがとれない場合に備えて仕込みも行われていた。夜網を打つことで休んでいるアユを捕獲していた。丸芝館ではアユが足りなくなると花火を打ち上げて周りに知らせていた。玉川亭には当時では珍しい冷蔵庫があり保管していた。

(2) 鵜飼漁

- ・長良川の鵜飼いは船を使うので有名だが、多摩川の鵜飼は徒鵜飼、漁師が川に入って鵜飼を扱って魚を取る。
- ・多摩川の漁では、大丸より下流は舟を使った川漁が盛んだが、上流になると舟を使わない漁法が主になってくる。下流では舟で投網を使うが、日野のあたりになると歩いて川の中に入って投網を打つ。
- ・徒鵜飼いは三人一組で行う。鵜使い（鵜匠）、残り二人は鵜先。鵜先がアユを追い込み鵜飼いが鵜を使って捕らえた。
- ・多摩川の鵜飼いはある程度古い時代から行われていたが、鉄道が開通し東京からの客が訪れるようになってきたことによって、もてなしとして発達した。

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

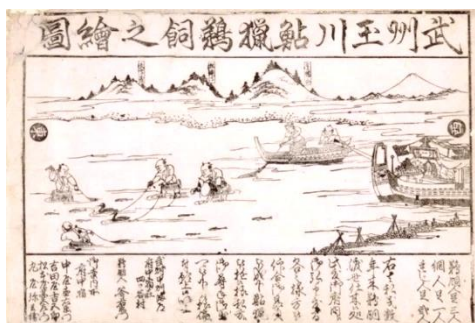
2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会



武州玉川鰍鰒飼之(明治期)

府中四ッ谷村の鰍匠による引札

3.2.4 多摩川の砂利採取

- ・関東大震災からの復興のため、コンクリート建造物の必要性から砂利の需要が高まっていた。日野市でも大正末期から砂利採取が盛んに行われるようになった。
- ・大正期までの砂利採取は主に手掘りで行われており、非常に多くの労働力を必要としていた。雨天では出来ないため天気の良い日に集中して行われていた。
- ・全国から出稼ぎの労働者が砂利採取に雇われていた。その中には中国や朝鮮から来た方もおり、砂利採取の中で新しい文化のふれあいがあった。
- ・砂利採取が盛んに行われたため、日野のあたりでは砂利がすっかりなくなった。

3.2.5 専門川漁師とペラ網漁

(1) 専門川漁師の登場

- ・昭和25年くらいから日野に料亭に属さず川漁で生計を立てる専門の川漁師が登場するようになり、昭和30年代末ごろまで活動を続けていた。
- ・当時は冬に魚は取れないと信じ込まれていたが、漁師は冬にウグイやオイカワを取り、贈答品として需要のある甘露煮にして生計を立てていた。
- ・主な漁場は多摩川だが、取りにくい時には相模川などにも遠征をした。漁は三人で行い、捕れた魚は立川の仲士に卸し、漁具の修理代は仲士からの網代で賄った。

(2) ペラアミ漁

- ・川漁師が行っていた漁法がペラ網漁である。木の板をシュロ縄にとりつけたもの(振木)を使って川に流して魚を追い込む漁である。非常に効率が良い漁法であり、ペラアミ漁でなければ飯が食えなかったといわれている。
- ・ペラは長さ50cmくらいの杉の細い板を曲げてシュロ縄につないだもの。ペラ網は絹糸を使った目の細かい網で下部に袋があり、大きな魚は袋の中へ、小さな魚は巻きとって捕獲していた。

第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日 (土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

- ・ペラ網漁は二人か三人で行われた。ペラで追い込んだ魚をペラ網で囲い込んで捕獲した。かかる時間はおよそ5分で、少人数でできる効率的な漁法である。やりすぎると魚が慣れてしまうので場所を変えていた。



ペラアミ漁の様子



ペラ

(3) ペラアミ漁の成り立ちをめぐって

- ・ペラ網漁には言説がある。

- ①ペラアミ漁は大正末期から昭和初期にかけて、日野周辺で砂利採集や土木作業などに従事していた朝鮮の人が行っていた漁法なので「朝鮮網」とも呼ぶ。
- ②朝鮮網というのは魚を取る網の名前。昭和初期に日野周辺で砂利採集をしていた朝鮮の人が使っていたためにその名が付いた。馬の尾の毛を用いた目の細かい網で、この網で蛇籠を囲い、蛇籠を叩いて中に潜んでいた魚を網の中に追い込んで捕った。この朝鮮網とペラを組み合わせで行われたのがペラアミ漁であり、網は絹糸製のものになった
- ③ペラアミとは杉板を曲げて作った魚を追い込む漁具。朝鮮から九州に伝わり、それを貰ったか、真似て作ったかした人物が九州から対岸の立川に来て、日野に伝えた。日野の川漁師がそれを真似て作り、サシアミを併用してペラアミ漁を始めた。

- ・いずれも朝鮮という言葉が入っており、関東大震災後の砂利採集という社会的な背景のもと、多摩川では多様な文化が接触する中でペラ網漁が生まれたと考えられる。

3.2.6 おわりに

- ・それぞれの漁法が行われる、編み出される背景には物語がある。
- ・郊外行楽地として発達したことで、鵜飼漁が盛んに行われた。
- ・大消費地である江戸が近くにあることで、様々な漁法が多摩川で行われた。
- ・漁法が生み出されたことの背景を探ることで、時代に応じながら川と共に生きてきた流域の人の姿、地域の歴史が見えてくる。

第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日 (土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

3.3 質疑応答・意見交換

3.3.1 概要

- ・セミナーの後半では、それぞれの講演内容に関する意見交換や、参加者からの質問への回答が行われました。



3.3.2 意見交換

- (1) 日野宮神社には仏教の菩薩や如来像があるが、日野宮神社はなぜ寺院ではなく神社なのか。

○金野氏

- ・明治以前の神仏混合時代には、神仏混合より虚空蔵菩薩像を神社の中でご神体としてお祀りしていました。
- ・四谷地区の周辺において仏像をお祀りする御堂などがありましたが、神社へと移転した経緯があります。
- ・日野宮神社は神仏混合時代の名残がみられ、現在の寺院や神社が明確となる前の姿を残しているといえます。

- (2) 隅田川で遊ぶよりも、甲武鉄道の開通で多摩川の鮎料理を求めて日野の玉川亭まで来た方が安いということだったが、都内からの足代は負担ではなかったか。

○金野氏

- ・負担にはならなかったと思います。当時の風俗画報にも書いてあることから、おそらく安かったと思われます。
- ・日野の玉川亭は芸者 2 人並べて隅田川で遊ぶより安いという記載が風俗画法ありますが、日野の玉川亭は、朝から汽車に乗って立川あるいは日野に来て、船に乗って料理を食べてなど一日遊べたと思います。

- (3) 日野と同じような場所として京葉線、小田急線、田園都市線、東横線など多摩川と交わる場所はあったと思うが、鮎料理を提供する料亭は日野だけではなかったはずでは。

○金野氏

- ・鉄道の開通時期は異なるけれども、鉄道が開通した先には料亭ができていました。
- ・二子玉川の近くにおいても料亭または産業地ができていました。二子玉川には日本民族学会の第一回の懇親会に用いられた料亭があったと聞いています。
- ・鮎料理、川魚料理を用いることは郊外鉄道の交わる場所で散見され、日野だけではなくたようです。

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会

(4) 江戸名所図にある多摩川鮎漁の図で後ろに架かっている橋は何橋か。

○金野氏

- ・多摩川日野の渡しあたりだと思いますが、具体的にどこであるかは書かれていないです。
- ・個人的には日野の多摩川鮎漁を現した図だと信じていますが、ほかの地域の地元の鮎漁の図として紹介されているケースもあります。
- ・日野においては渇水期に土橋を造っていましたが、渇水期に鮎漁は行われないので、図中の橋とは一致しないと思います。



『江戸名所図会』から「玉川鮎漁」天保5年

(5) 江戸時代、軍事上の理由として河川への架橋においては厳格に禁止されていたと思うのだが、江戸名所図にて2箇所ほど木造の橋が架かっている。これらの橋はいつごろ建設されたのか。

○小野氏

- ・近世において河川への架橋が行われなかった理由として、軍事上の理由であったという通説もありますが、洪水で流されてしまうため水量の少なくなる冬場だけ、仮橋を架けることが江戸時代には行われていたようです。
- ・江戸名所図に描かれている橋は仮橋にしては立派です。そのため、近世の多摩川において図のように立派な仮橋が架けられるのは、東海道の六郷橋か甲州街道の日野の渡しの2つしかないと思います。
- ・江戸名所図会の絵は8枚の4セットのもので、初めの2セットが鳥瞰図、その次の絵が多摩川の鮎漁にスポットを当てた絵になっています。この絵は多摩川の日野に関する記載の中で出てくるので日野である可能性が高いです。
- ・加えて、この絵には多摩丘陵も富士山も見られない一方、左奥のほうに低い段丘のよ

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会

うなものが見られ、これは武蔵野台地を描いているものと考えられます。これらの背景情報から、下流ではなく中流域の日野のあたりがふさわしいと思います。

- ・絵中の左上で川岸のあたりで釣りをしたりする風景は、歌枕として多摩川の奥多摩から調布から府中を舞台にした絵によくみられことから、江戸名所図にある多摩川鮎漁の図は、明らかに多摩川の上流から下流を俯瞰した図だと考えられます。
- ・よって、江戸名所図にある多摩川鮎漁の図は日野にある日野橋の少し上流の部分を描写したものだというのが私の見立てです。
- ・日野橋が造られたのが大正15年(1926年)、六郷橋は覚えていないのですが、その次に重要な関戸橋の建造が昭和9年です。つまり、大正や昭和になって常設の橋が架けられたということです。

(6) 七生村と日野町の位置関係はどうなっているか。

○金野氏

- ・今の日野市の中央に浅川が流れています。厳密には異なりますが、浅川よりも南側が七生村、北側が日野町です。日野町自体も日野市区と桑田村があり、合併して日野町となりました。また、七生村は七つの村が合併してできました。昭和33年に日野町と七生村が合併し、その後市制を施行して日野市になりました。
- ・日野市市民の森ふれあいホールの近くにある立日橋の場所が、かつての日野の渡しがあった場所です。立日橋は、下が赤い自動車橋でその上を多摩モノレールが走る二重の橋となっております。
- ・日野橋を渡った場所と、甲州街道の曲がり口であり今の新奥多摩街道入口という名の交差点となっている場所を結ぶ道が、かつての甲州道中となっており、その真ん中辺りに玉川亭がありました。現在では痕跡が残っておりません。

(7) 多摩川の砂利採取の許認可はどのようになっていたか。

○小野氏

- ・多摩川の砂利採取の許認可については、川での事業は国の管理になるため、国交省の専門官の方のほうが詳しいと思います。
- ・多摩川の砂利採取が全面的に禁止になったのが東京オリンピックの年であったと記憶しています。
- ・砂利採取によって、多摩川の名前の由来でもある美しい玉石が消えてしまい、鮎は石のあるところに隠れることから鮎は減少しました。他方で、砂利採取によってペラアミ漁が伝来したということもありました。

第12回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024年7月20日(土) 10:00~16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB配信

参加者：午前：9名、午後：59名(会場13名、WEB46名)

主催：多摩川流域懇談会

(8) 多摩川の砂利採取のために中国や朝鮮から来た人はどこに住んでいたか。

○金野氏

- ・立川もしくは日野の界隈に飯場の形の宿舎で暮らしていたそうです。一部は、下宿のような形で住む家もあったと聞いていますが、どの家が下宿をしていたかなどははっきりしていません。

(9) 朝鮮でも鮎が遡上する川があるのか。

○金野氏

- ・あると聞いています。和訳された韓国の川漁の本をいただいているのですが、鮎が遡上することが書いてあっても、具体的な漁法が書かれていないです。韓国での具体的な漁法についてはこれからの課題です。
- ・鮎漁、特にペラアミ漁について知るために、いずれは朝鮮半島に行きたいです。

(10) 本来鮎は遡上をして降下はあまりしないが、瀬張漁の図において鮎が下流に向かってる。鮎の生態からして、鮎の降下を利用して捕獲することは可能か。

○金野氏

- ・漁師の鈴木さんや安西先生から教えていただいた瀬張漁の図についても、鮎の降下を利用して捕獲する形になっています。
- ・鮎は縄張り意識が強く、藻を食べて入ってきたものを追い立てるから友釣りが成り立つと個人的には習ってきたが、漁師の話では、実際に遡上してきた鮎は一定の期間、時間帯によって川を上下しているそうです。
- ・漁師の話では、多摩川に限らず鮎は縄張りを持っているけれど、夕刻になると淵に入って休むため、淵に刺し網を設置すると刺し網漁が成り立つとも説明されています。
- ・今後、川における鮎の生息密度によって縄張りを作るか否か確かめ、瀬張漁の仕組みと鮎の生態の関連性を明らかにしたいです。

(11) 今でも日野で鮎漁は行われているのか。

○金野氏

- ・講演で申し上げたような鮎漁は現在、行われておりません。
- ・釣りに来る人はいて、6月の鮎の解禁の時期になると鮎釣りの方を鉄橋の上から眺められます。
- ・平成の時代まで多摩川の漁業協同組合日野支部の方々が、公開での伝統漁法を実施していました。しかし、ある時期に鵜が大量に発生していくら放流しても鮎が居ついてくれなかったため中止されました。復活の機会を待ち望んでいましたが、コロナ禍だったこともあり、未だ復活していません。日野市としても浅川で鮎祭りを実施していましたが、現在は実施していません。どちらの場合も伝統漁法の公開や復元を目的

第 12 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川から紐解く日野の歴史と暮らし」

2024 年 7 月 20 日（土） 10:00～16:00

場所：午前の部：日野駅～日野市市民の森ふれあいホール

午後の部：日野市市民の森ふれあいホール・WEB 配信

参加者：午前：9 名、午後：59 名（会場 13 名、WEB46 名）

主催：多摩川流域懇談会

として行っており、商業的な鮎漁は行われていません。

(12) 日野用水を守るにはどのようにすればよいか。

○神谷氏

- ・用水を守るとはとても深刻な問題です。日野用水の系統は3種類ありまして、多摩川系の用水の日野用水上堰、日野用水下堰が1つ目、黒川の湧水由来の豊田用水系が2つ目、そして浅川系の平山用水が3つ目です。
- ・日野全体の用水をどのように考えて守っていくのか考える上で日野全体の景観の背景に目を向けると、特殊な沖積低地が形成され、それによって豊かな水田が形成されております。そして日野台地の湧水は、そのような景観の本質です。日野において用水を守るには、湧水系の用水は重要です。

(13) 鮎は今の日野の多摩川に生息しているのか。

○金野氏

- ・鮎が日野に生息しているかどうかは生態を専門とした方に伺いたいと思います。
- ・日野の多摩川に鮎の姿を見かけただけでは生息したとは言い切れず、鮎が遡上して育っていき、海に降下していく行動を観測できて初めて鮎は生息しているといえます。

3.4 閉会挨拶

京浜河川事務所の大野氏より閉会の挨拶をいただき、第 12 回多摩川流域歴史セミナーを閉会としました。

＜主な内容＞

- ・今日は朝早くからご参加いただきありがとうございました。
- ・最後のディスカッションの中で、多摩川の鮎の話が出ており、いつかおいしいアユが食べられたらと思います。行政としても、市民の皆様、学識者の方にご参加いただき、活動を広げていけたらなと思います。



大野氏

以上